

地域色を配慮した景観舗装に関する考察

山梨大学工学部土木環境工学科 学生会員 ○加藤 圭望

山梨大学工学部土木環境工学科 正会員 大山 勲

1. 背景と目的

歴史的建造物の保護活動をしている地区では、住民や専門家で話し合い条例や保存地区を設けるなど、まちづくりに取り組んでいるが、建造物単体の保存について力を入れているところが殆どで、事業の内容によっては、沿道建造物の地域特性を充分考慮せず道路整備が単独で行われることが少なくない。特に、道路舗装の色彩は景観への影響が大きく、伝統的な町並みに違和感を与えてしまうことがある。けれど、それぞれの地域にある伝統的町並みにふさわしい景観舗装のあり方は、十分明らかにされているとは言い難い。本研究は、対象地域に古くからある色(これを地域色と定義する)を抽出し、それを踏まえた舗装材・模様パターンの在り方を考察する。

2. 地域色調査の概要

2.1 対象の選定

歩行者を主な対象とした区画道路を道路の対象とする。また、木壁の色調が景観の基調色となっており、伝統的建造物保存地区にも選定されている山梨県早川町赤沢地区と、同じく木壁を景観の基調色としている東海道五十三次の1つである、静岡県静岡市宇津ノ谷地区を対象地とする。地域色は道路沿道景観の主要要素である、歴史的建造物(屋根・外壁・雨戸・雨樋・窓・格子・戸・塀・石垣)とた。道路舗装は赤沢地区では地元産の輝石安山岩、宇津ノ谷宿では御影石を用いた小舗石舗装である。

2.2 調査方法

現地にて対象物に色票当てて、視感測色し、マンセル値に置き換える。この際の色票はTOYO COLOR FINDER 1050を用いる。

2.3 調査結果

マンセル値を、マンセル色度図にプロットしたものが(図-1)、(図-2)である。

2.3.1 宇津ノ谷宿と赤沢地区の地域色の特徴

1).宇津ノ谷宿 (図-1)

5B、5PB 付近にあり、彩度が 0.5 程度、明度が 3.5 程度と落ち着いた色彩は、瓦の色彩である。5YR に集中しており、彩度が 3 以下、明度が 3～6 程度と幅がある色彩は木壁の色彩である。宇津ノ谷はこの二つの色彩から成り立っており、特徴といえる。全体的に彩度は低く、落ち着いた色彩である。明度が 8 以上は障子の色彩である。

2).赤沢地区 (図-2)

5YR 付近に集中しており、彩度は 2 以下、明度は 5 以下と落ち着いた色彩は、木材の色彩である。5Y、5GY 付近で彩度が 2 以下、明度は 5 以下と落ち着いた色彩は、瓦の色彩である。彩度が 4 以上と他の色彩から離れているのは、土壁の色彩である。全体的に彩度は 2 以下、明度は 5 以下であるのが特徴。

2.3.2 宇津ノ谷宿と赤沢地区の道路舗装の特徴

1).宇津ノ谷宿 (図-1 の丸部分)

御影石を用いた小舗石舗装である。舗装は 2 種類あり、サビ・サクラ・クロ・グレーの 4 種類の色を用いている舗装と、サビを用いた舗装がある。サクラが R、サビが 5YR 付近に集中しており、彩度が 3 以上、明度が 6 以上の色彩が、特徴的である。サクラとサビは色相、彩度、明度とも近い値にあるが、クロとグレーは色相が GY・P と離れており、また、彩度が 1 以下と大きく違う。彩度が大きく違う色彩を用いているのは特徴的である。また、地域色とも彩度が大きく離れた値であるのも特徴である。

2).赤沢地区 (図-2 の丸部分)

地元で取れた輝石安山岩を用いており、宇津ノ谷に比べるとかなり大き目の石を用いている。色相は R・YR・GB・PB と離れているが、彩度は 2 以下、明度は 5～8 程度と宇津ノ谷に比べ、かなりまとまりがある。全体的に暗く、落ち着いた色相である。

キーワード：地域色、景観舗装、地域独自、色彩、区画道路

連絡先：〒400-8511 山梨県甲府市武田 4-3-1 山梨大学工学部土木環境工学科 環境計画研究室



写真-1 宇津ノ谷宿



写真-2 宇津ノ谷宿



写真-3 赤沢地区

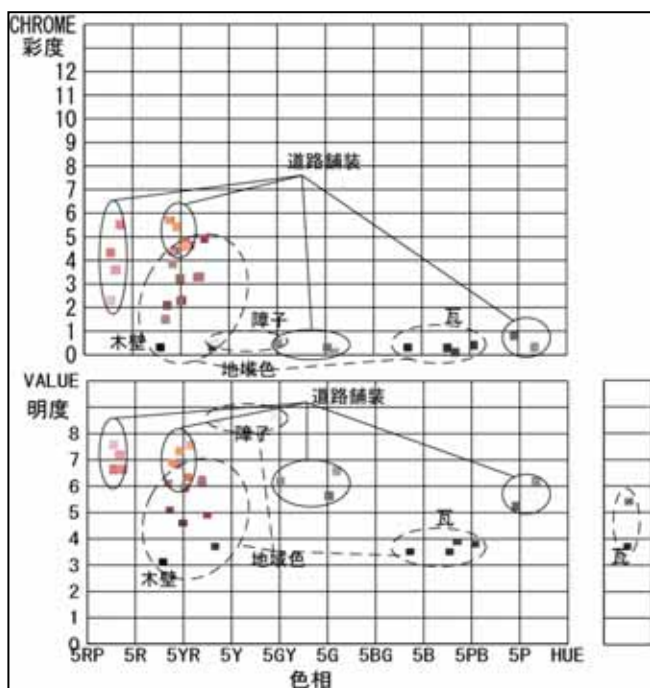


図-1 マンセル色度図による宇津ノ谷宿の

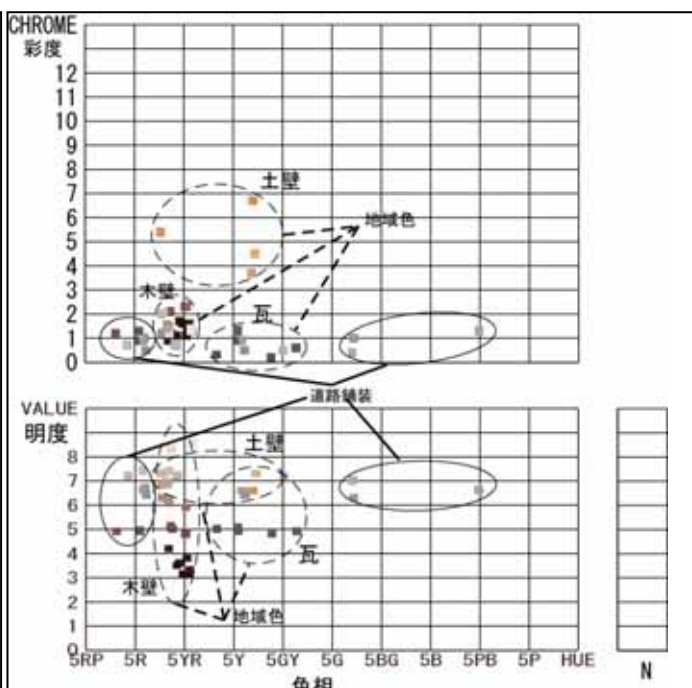


図-2 マンセル色度図による赤沢地区の色彩

2.3.3 宇津ノ谷宿と赤沢地区の比較

地域色は障子と土壁の色彩が大きく異なる他は、木壁と瓦の色彩であり、大きな色彩の違いはない。道路舗装の色は、同じ石材を用いても宇津ノ谷宿と赤沢地区では彩度に大きな違いが見られる。宇津ノ谷宿(写真-2)は、彩度が高いものと低いものを混ざって使っており、赤沢地区(写真-3)に比べて道路と周りの景観とに違和感を受ける。宇津ノ谷宿(写真-1)には、サビの御影石を1種類だけ用いた舗装があり、これは木壁と色相・明度が近く、道路の色彩と周りの景観に一体感がある。違和感は彩度が強く影響していると考えられる。

3. まとめ

伝統的町並みにおける道路舗装の色彩は、他の景観と色相を同じにするにするか、色相が異なっても、彩度・明度を周りの景観の値と近づける。あるいは、

彩度が2以下に落とすと、落ち着いた道路景観が保たれる。また、彩度が高いものと低いものを混ざった場合、道路舗装が目立ってしまうため、なるべく避けたほうが良い。今までの景観形成の規定としては色相の指定だけをしているところが多いが、彩度・明度といった詳細な規定をすることにより、微妙な色の調整をすることができ、この方法により町並みの色彩を定量化して、道路舗装を検討することが望まれる。

今後の課題としては、評価実験による検証、石材の磨き方による粗目度と光の反射による色彩の違い、支える面である道路舗装の特有の色彩の在り方などを検討する必要がある。

参考文献

「まちの色をつくる 環境色彩デザインの手法」
吉田慎悟著 (株)建築資料研究社発行